

米Phone.com CEO

A l a i n R o s s m a n n

アラン・ロスマン

IMT-2000時代を見据えた
携帯電話の現状と未来



interview



携帯電話はいま単なるコミュニケーションの手段としてだけでなく、インターネットにアクセスするための手段としての側面を大きくしている。それにつれて携帯電話でEQ 電子商取引 を行う動きも活発になるなど、今後の本格的な展開が期待されている。このように携帯電話でインターネットを活用するための中核技術となるのが、フォンドットコムが開発したWAP (Wireless Application Protocol) フォーマットだ。ここではフォンドットコム CEOに携帯電話の現状と未来を聞いてみた。

聞き手: インターネットマガジン編集部
Photo: Nakamura Tohru

☎: アマゾン・コムがモバイルコマースへ参入したように携帯電話などを使った商取引への注目が高まっていますが、この分野は今後どのように発展していくのでしょうか。

ロスマン: モバイルコマース関連では、いま多くの可能性が生まれつつあります。なかでも、アマゾン・コムのように携帯端末経由で物を売るという側面が一番ホットだと言えるでしょう。いまアメリカではこの分野が急進しており、パイ・コム (Jump01)をはじめ、数多くの大手企業が次々この分野に参入しています。

なぜなら、モバイルによってインターネット上の仮想店舗は販売のチャンスが増えるからです。ユーザーが携帯電話などを使っていつでもアクセスできるということは、営業時間を延長するのと同じ意味を持つのです。たとえば、これまでアマゾンで物を買うのはパソコンの電源が入っている間だけでしたが、人々がウェブ対応の携帯電話を持ち歩くようになれば、目を覚ましてから寝るまでいつでも商品を買えるようになります。これは、コマースサイトにとっては大きなチャンスといえるでしょう。

もう1つの可能性は、ときにM パース (モバイルの財布) やモバイルマネーとも言われる支払い機能です。携帯電話で個人対個人、あるいは個人対企業の支払いができるようになるのはまだ先の話になるでしょうが、そうした試みは急速に開発されています。というのも、いまアメリカでは「ペイパル」 (Jump02) というクレジットカードを使って、友達など個人間での支払いができるサービスが普及しており、毎日1万人ずつ利用者が増えています。こうした仕組みが

モバイルでも展開されるようになれば、いつでもどこでも使える携帯電話は、いわゆる「コピキタス」の世界を実現する完璧な支払い手段となるでしょう。

3つ目は銀行などの金融機関におけるさまざまな口座間の取引や決済などをWAP上で行う仕組みで、これはいま各分野で検討が進んでいます。米国では、たとえば口座からの自動決済や口座間の送金などを、24時間いつでもできるようなソフトの開発をしています。

Jump01 www.buy.com Jump02 www.paypal.com

☎: このようなコマースやサービスを提供する会社とフォンドットコムとの関係を教えてください。

ロスマン: 私たちのビジネスは、いわばそうしたコマースやサービスの実現を手助けするツールを提供することです。つまり、セキュリティや暗号、認証といった「ビルディングブロック」(構成要素)を提供することにあります。これにより、ユーザーはたとえば決済情報や配送先、クレジットカード関連の個人情報などをイチイチ小さな電話機に入力しなくてもよくなり、電話としての使い勝手を損なうことなく新しい機能を使えるようになります。

つまり、私たちはいかに携帯電話を快適に使うかという技術は提供しますが、コマースサービス自体を提供することはありません。あくまでも事業主や通信事業者、あるいは加入者が便利に使うための「コアテクノロジー」(中核技術)を提供するだけです。しかし、逆に言えばアマゾン・コムが今日のような成功を収めたのは、まさに

すべてのデータはIPに集約され
携帯電話が「統合メディア」になる。

こうした強力な技術のサポートがあったからだとはいえるでしょう。

☎: 現在、携帯電話にはカメラや音楽プレイヤー、録音機、あるいはテレビなどの機能が付いているものもありますが、フォンドッ

トコムの考える「携帯電話のあるべき姿」とはどのようなものですか。

ロスマン: 現在、非常な勢いで技術が進歩しています。それによりたとえば統合化や小型化、コスト削減が進み、いま適切だと思うものが3年後には必ずしもそうではなくなるでしょう。特にこの分野は日本のメーカーが得意で、ソニー、東芝、カシオなどから、次々と魅力的な携帯電話が出ています。

ですから、一概に「これ」というのは難しいのですが、私はまず第一に携帯電話は小型かつパーソナル、そしてポータブルであるべきだと思っています。つまり、私たちは決して電話を大型化（肥大化）する方向のビジョンは持っていないのです。

ヨーロッパのあるメーカーでは、PDA型の電話機のようなものを模索しているようですが、これは数量的にはそれほど売れないでしょう。やはり、まず小型でなくてはなりません。そのうえで画面でビデオが見られたり、カメラやMP3プレイヤーなどの機能を備えたりするものがこの3年間に必ず登場してくるでしょう。そのために私たちも世界標準を作れるように努力をしているのです。

☎: 無線業界では、携帯端末はいずれアプリケーションと一体になって、用途別にいくつもの携帯無線端末を使い分けられるようになるの見方もありますが、そのあたりはどの

ように見えていますか。

ロスマン: これは絶え間なく論争の続くポイントですね（笑）。ただ、複数の端末になるということには異論があります。デバイスとして十分な機能を備え、機能の統合が進んでいくと、最終的にはすべての機能は電話機に集約されると思っています。というのも、まず市場に出回る数的な問題もありますが、なにより私は「音声」こそが一番のキラアプリケーションだと思うからです。音声なら、世界中誰もが同じように便利に使えますよね。

ただ、電話にいろいろな機能が集約されていくのと同時に、やはり特殊で高度な機能を備えたデバイスは出てくるでしょう。ある時点においては両極化が起こり、多機能な電話がある一方で、特定用途向けのワイヤレス機器が普及するかもしれません。

しかし、その後その特殊デバイスのコストが下がってくると、それらの機能はすべて電話に統合されていくでしょう。たとえばある時点では電話とカメラが別々に併存していても、3年後にはあたり前のように電話にカメラが搭載されるといったことです。

ただし、搭載される際には、その機能は十分に安くなってる必要がありますし、それにはもう少し時間がかかるでしょう。やはり、しばらくは特殊で高度な機能を持ったデバイスと電話が併存し、やがてはそれが電話機に統合されていくというのが、私

の描いているビジョンです。

☎: 日本では来年から3G（IMT-2000）が始まりますが、IMT-2000時代のキラアプリケーションは何になると思われますか。

ロスマン: その前にまず、PC時代のキラアプリケーションは何だったのかを振り返ってみましょう。70年代当時も、なにがパソコンのキラアプリケーションかということで議論があったからです。これは初期のアップルの広告の話なのですが、台所で料理のレシピなどをパソコンで見るというのがありました。その当時パソコンがどこで活躍するかについて人々の想像力があよぶのは、キッチンが限界だったのです。

その後、アップル対応の表計算ソフト「ビジュアル」が発売されると「これぞパソコンのキラアプリケーションだ！」となりました。その瞬間までそれは誰にも予想できなかったわけです。

このように予想は大変に難しいのですが、私見として述べさせてもらうならば、日本においては若い世代が非常に力を持っています。特に携帯電話の世界ではかなりの比重を占めています。そこで、まずはグループで、あるいはインタラクティブにできるゲームがキラアプリケーションになるのではないかと思っています。これが3Gの広帯域ネットワークの支援により、日本市場で大きな人気となり普及するだろうと見ています。

また、ビデオの機能も考えられます。いわゆるポケットビデオとかITビデオというものです。映画やMTVのようなミュージックビデオも見られるようになるでしょう。

そのほか、3Gのような広帯域、高速の通信網においてはボイスオーバーIPにも注目です。これはビジネスの仕方に絡んでくるので、結局は通信事業者がどう扱うかになるのですが、技術的な問題はありません。ボイスオーバーIPを携帯の世界に導入すれば、たとえば長距離の電話代を払わずにアメリカにかけたり、ビデオや音楽を無料で聴取したりできる世界が実現できるようになるでしょう。

とにかくIPの技術によってコミュニケーションや通信のあり方がまったく根底から



A l a i n R o s s m a n n

アラン・ロス

覆されることもあるわけです。ある日突然、業界に大きなショックを与えるかもしれません。いずれにせよ、こうした音声やビデオなどのデータはIPに集約されて携帯電話は統合メディアになっていくでしょう。

Q : ロスマンさんは先日米国で開催された「ワイヤレス2000」でも、アメリカの無線分野はいまは遅れているが、いずれは他国を追い抜くという予測をされていますが、それは大体何年後ぐらいなのでしょう。

ロスマン : 私の予測では2、3年後です。いまアメリカではさまざまな要素が混ざり合った混沌とした状況で、いくつかの「標準」が林立しています。とにかくさまざまな可能性が提案されており、その整理をするだけで右往左往している状況だと思います。

確かにアメリカはワイヤレスの分野においては後発です。いろいろなのが細分化されており、発展も非常に遅かった。なにより、それらを集約してまとめる「統一力」が欠けていたのが原因でしょう。ヨーロッパの場合は先に標準化を進めたのでスムーズに発展しました。そして、日本では国内の通信事業者の統一力がありません。一方、アメリカではあくまでも純粋な市場原理に任せきりにしていたわけです。

ただ、最初のスタートが遅くても、標準化が進めば迅速に発展すると思いますし、いったん追いついてしまえば非常に強い影響力を持つと思っています。

Q : WAPにはそうしたアメリカ市場の統一の手助けになるだけのパワーがあると思いますが、標準化についてWAPはどのような役割をはたしていくのでしょうか。

ロスマン : そのためにはWAPの今後の展開や進化を見しておく必要があります。WAPの次のステージを考えると、XMLとの融合、つまりXMLベースのWAPというものが考えられます。これが浸透すれば、1つの基軸でPCにも電話にも、また他のデバイスにも対応できるようになります。つまり、XMLベースにすることが1つの集約力になるわけです。すでにWAPコミュニティーに参加す



アラン・ロスマン
 iPhone.com CEO
 アップルコンピュータを経てラディウスを設立。C-Cube副社長やEO CorporationのCEOを歴任したのち、1994年12月にフォンドットコムの前身となるリプリスを創設。リプリスはのちにアンワイアードブラネットとなり、1999年4月にフォンドットコムと改名する。

る数百社はその方向に向けて努力を続けています。

そして、これによりPCの世界との融合も実現されるのです。アメリカではパソコンは進んでいますがモバイルは遅れている。日本はその逆で、モバイルは進んでいるがパソコンはまだ少し遅れている。しかし、インターネットPCという形で急速に追いついている。ヨーロッパも日本と同じでモバイルは進んでいますが、国によってはPCやインターネットの普及率は低いところもある。しかし、XMLによりPCとモバイルの融合が図られるとこれも変わっていきます。

日本ではこの2年間でインターネットによって急速にパソコンが普及したことには私も驚いていますが、XMLによってパソコンはさらに伸びていくでしょう。そしてアメリカでは、出遅れていた携帯電話機の世界が成長するようになるでしょう。このようにパソコンと電話の融合がXMLによって進み、それが今度は総合技術となって、さらなる統一力になると思っています。

Q : データのやりとりという観点では、無線以外にもメモリーカードによる擬似的なネットワークが注目されています。携帯電話にもメモリーカードが導入されつつありますが、この両者のかかり合いについてはどのように見えていますか。

ロスマン : 技術が急速に進歩すると、消費者に対して完全なソリューションを提供するために、さまざまな方式が登場してきま

すが、メモリーカードも大変興味深い1つのソリューションだと思います。これはカードを持ち運べるローカルな範囲内では非常に有効ですが、距離的に離れているところでは使えないという純粋なネットワークとは少し異なる特徴を持っています。ただ、非常にキャパシティーが大きいうえに、伝送コストがゼロなのは大きなメリットですね。

アプリケーションには多くのタイプがあるので、なかにはこうしたメモリーカードに適したアプリケーションがあるのは事実です。たとえばパソコンから精細な漫画や写真のようなものをメモリーカードにダウンロードして、それを電話で見るような場合や、データとして日々更新されない性質のものならば、リアルタイム性は必要ないのでメモリーカードは便利でしょう。

一方、「ウェブカム」のように、現在のパリの天気わかる写真が見たいとか、そういったリアルタイム性や距離を要する情報やデータを扱う場合には、メモリーカードは役に立たないでしょう。

ただ、いずれにしてもネットワークの高速化がさらに進めば、どんな種類のアプリケーションであってもすぐに電話に落とし込めるようになるので、いずれはこうしたメモリーカードも不要になるのではないかと思います。つまり、ネットワークは物理的な存在を置き換えることができるのです。これこそまさに「IPの持つ総合的な力」といえるのではないのでしょうか。

Q : ありがとうございました。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp